

特集にあたって

稲垣貴彦^{1, 2)} 栗山健一^{2, 3)}

現代において、うつ病はあらゆる年代における精神健康上の重大な疾病負荷であることが共通認識となりつつある。伝統的な臨床医学においては、うつ病は成人期、特に中年期以降に有病率が増加することが、共通認識とされてきた。有病率を見積もるための疫学調査や臨床研究のデータも、こうした認識を裏付ける一方で、なぜ成人期以降にうつ病が増加するのかを説明づける生物学的な証拠はきわめて乏しい。古典的な精神病理学および社会心理学的考察の多くは、一定の心理的成熟とともに、身体的老化(衰え)、社会的ストレスなどの複合的要因により、うつ病の発症を説明している。

近年、子どものうつ症状は、成人とは異なる表現型をとるという考え方が支持されるようになった。子どもにおける心理ストレスに対する反応の未成熟性や、適応不全の表現形における成人との差異を考えると、こうした考え方には一定の説得力がある。少なくとも、子どもは成人よりもストレス脆弱性が高く、うつ病の発症やこれに伴う社会的逸脱による発達・成熟上のデメリットを考慮すると、より早期に適切な介入をすべきであるという発想は妥当であり、このために早期に診断する必要性はもっともであろう。

子ども特有のうつ症状を考慮し有病率調査を実施すると、子どもにおいても成人期以降の有病率には及ばないまでも、これまで想定されていたよりかなり高い有病率が報告されるようになった。伝統的な臨床医学・精神病理学で支持されてきた、うつ病は成人期以降の疾患という概念も、有病率に関する調査結果が覆ると途端に揺らぎ始める。そのような中で、わが国は世界と比較すると、子どものうつ病に対する関心が十分高まっていると言えるであろうか。2019年末に始まった、新型コロナウイルス感染症(COVID-19)の世界的流行により、全世界的に精神健康の悪化が報告され、成人のうつ病有病率が増加したと報告されている。子どもにおいても同様に、うつ病の有病率増加が報告されていることから、子どものうつ病により強く関心を持つ必要

1) 医療法人明和会琵琶湖病院思春期青年治療部(〒520-0113 滋賀県大津市坂本 1-8-5)

2) 滋賀医科大学精神医学講座

3) 国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所睡眠・覚醒障害研究部

性が高まっている。

もちろん、子どもと成人のうつ病の病態相同性に関しては、うつ症状の表現型における差異のみならず、治療反応性や予後における差異なども報告されていることより、まだ結論に到達しているとは言えないであろう。しかしながら、子どもの精神健康を守るためには、こうした議論に積極的に関与し、さらなる科学的・臨床的証拠の収集に努める必要がある。

本特集は児童青年期精神医学の専門家より、上記議論に関する最新の知見を紹介いただくとともに、子どものうつ病を適切に診断し、医学・社会的介入を行うためのアドバイスを簡潔かつ具体的にまとめていただいた。臨床の最前線で子どものうつ病診療に携わる先生方はもちろんのこと、あらゆる精神医学に携わる方々の参考になる特集となれば幸いである。